

## ドクターインタビュー

近畿大学医学部 皮膚科学教室 柳原 茂人 先生

近畿大学病院、皮膚科で日々患者さんの治療に邁進される柳原茂人先生。自身もアトピー性皮膚炎の患者である柳原先生に、医師と患者、両方の視点から、治療や病気との付き合い方について伺いました。

—— 皮膚科医を目指されたきっかけを教えてください。

もともとはエンジニアを目指して、大学は工学部に進みました。その時に、体を鍛えたいと思って剣道部を選んでしまったんですね。小さい頃からアトピーと喘息があって、中学の時に剣道をして喘息が悪化した経験があり「今度はリベンジだ!」という想いで挑戦してみました。が、やっぱりダメでした。剣道の防具、面は洗えないので顔にカビを纏ってしまっただけです。汗をすぐ流さなかったのも良くなって、今度は喘息は悪くならなかったのですが、アトピーがむちゃくちゃ悪くなりまして、伝染性膿痂疹(とびひ)とカボジ水痘様発疹を併発しました。顔がすごく酷くなって、2、3週間家で安静という状態になりました。その時に、「なんだこの病気は、喘息を治すためにスポーツをやったのにアトピーが悪くなった…」と打ちのめされたような気持ちになりました。その時は、皮膚科に通ってリカバーして、なんとか剣道は4年間続けました。

アトピーが悪化すると、生活に制限が出て、スポーツも夜更かしも、暴飲暴食もいろんなことができなくなりました。そして、「なんだこの病気は?」を抱いたまま、物理を極めようと北陸先端科学技術大学院大学に進学してみると、そこはいろんな専門分野から来た人の集まりでした。物理専攻の人が興味があると生物に進んだり、文系から情報工学に進む人もいたり、「おもしろい奴ら」の集まりだったんですね。自分の専門をいとも簡単に変えてやりたいことをやっている人たちに会って、じゃあ自分も「なんだこの病気は?」という想いから、医学の道に進んでみようと思いました。人間の体はメカニズムで動いているところは医学も物理も根底は一緒なんですよ。そこで一旦大学院を卒業して、20代半ばで医学部にチャレンジしました。親の脛髻ですが、両親もアトピーで苦しんでいるのを見てきていますから見守ってくれました。

—— 医学部ではどのようなことに取り組みられましたか?

アトピーを治したい、なんでこんな病やねん、この不思議を解明しようと、皮膚科に進むために医大に行きました。医学部で勉強するうちに、アトピーや喘息などアレルギー疾患の治療は、近年いい薬も出てきていますが、まず養生や生活習慣指導が大切なのではないかと思うようになりましたね。医学生時代に石井正光先生の漢方の講演会を聞いて、これは面白いと感じました。外来見学させて頂いたところ、アトピー患者さん多いっぱい来ていて、「こういう食生活がいいよ」と、すごく親身になって指導しておられたんですよ。これは学ばなくてはいけません。そして、卒業後は大阪市立大学医学部(市大)の皮膚科に進み、石井先生に弟子入りしました。

臨床をやっていると患者さんの「くよくよ」と「イライラ」というのは、治療の妨げになっていると感じます。石井先生にアトピーを治すために必要な6つの柱は、食事、睡眠、呼吸、排せつ、運動、心で、その中でも心がメインであると教えてもらいました。6つの材料を揃えて初めて、漢方を治療に加えると体もまわり始めるのだとこの考えには感銘を覚えました。心の持ち方が大事で、落ち込んでしまった心を立て直すことが大切。必要であれば精神科の治療も併用して、心を良くしないと体が治らない。日々の診察では、心や皮膚をバックアップする漢方を処方しています。漢方だけで治すのではなくあくまでお手伝い。体を整えた人にくべる薪のようなものです。メインの外用療法に併用しています。

—— 治療についての方針や、日々の診察について教えてください。また、新薬「デュピルマブ」についてもお聞かせください。

やはり皮膚だけ診てはいけません。心を含め体全部を整えてからの皮膚ですから、初診の方は少し診察時間を長めにとって、今までどういう治療してきたか、アトピーにどういう考えをもっているのかを聞きます。そこで治療方針を立てますが、どうしたいか患者さんの希望も聞きます。ステロイドなしを希望する患者さんもいますが、その治療は本当に大変です。漢方と抗ヒスタミン剤、保湿剤だけではなかなか追いつかないこともありますよ。

新薬のデュピルマブについてですが、高額な薬なので、いろんな治療がうまくいかない患者さんに使用する先生が多いと思います。私も使用してみました。私の場合、そんなに自覚はなかったんですけど、少し酷くなっているのを家族に指摘されて、粉が散るから掻かないでと小さい子どもに言われたり、それで掃除係になったり、私だけ違う部屋で寝かされたら…(笑)。これって、アトピーの「疾病負荷」ですよ。自分の写真を見たら赤くて結構な重症度であることに改めて気づいて、よしデュピルマブを使ってみようと思いました。私の場合、初めて打った直後から楽になった感じがしました。外用薬を塗る負荷から解放されて、つきまばちゅうことがありました。良くなって注射をしなくなった今も、前より調子はいいですが、週一はがつりステロイド外用薬を塗っています。やっぱり水面下に封じ込めても上がってくる力がどうしてもあるのが難しいところですね。副作用と言われる結膜炎の



柳原 茂人 (やなぎはら しげと) 先生

## 【ご経歴】

- 1996年 大阪市立大学工学部応用物理学科卒
  - 1998年 北陸先端科学技術大学院大学材料工学研究科博士前期課程修了
  - 2005年 関西医大卒
  - 2013年 大阪市立大学大学院修了(医学博士)
  - 2014年 鳥取大学医学部 皮膚病態学 助教
  - 2017年 近畿大学医学部 皮膚科学教室 講師
- 【所属】 日本アレルギー学会・日本東洋医学会・日本皮膚病理組織学会・日本皮膚科学会
- 【研究分野】 皮膚病理、皮膚漢方

症状も出ました。眼科で診察しましたが、濾胞(ろほう)がでないアレルギー性とは言えないので副作用でしょうということでした。点眼薬で対応できました。

私の患者さんでは、デュピルマブを使い始めてやめた方はまだいないです。良くなって途中で来なくなってしまいう方もいますが、そこはガイドラインを守って水準よりしっかり押さえてしまった方が維持できると考えます。体幹四肢には効果が出やすく、頭頸部が特に重症の人は効くが遅いと感じますが、遅いからといって止めない方がいい、全然効かなかったことはない、効果は後からついてくると思っています。

—— 単身赴任(鳥取大学ご勤務時)に、症状悪化を経験されたとお聞きしました。

市大に勤務していた時は痒痒って堅いぶつぶつができるタイプの症状がありました。鳥取に行って、それがなくなったので、衣食住の住も関係していると感じました。おそらく水も空気も良かったんですよ。それで一旦楽になりましたが、雨の多い地域で湿気が少し多く、3年目ぐらいに悪くなってきました。カビ抗体が上がっている、おそろしく原因かなと思います。最後の1年は、単身赴任でした。男の単身赴任は好き放題するんですよ。ラーメンやB級グルメも好きなように食べるし、めんどくさいので掃除もしない。当直も多くて、生活が乱れると悪くなりましたね。自分自身でアトピーに悪いのもわかっているんだけどなかなか喉元過ぎれば(笑)。

でも絶対ダメだと思ひ込むのも良くないです。悪化因子が一つだと考える患者さんが多いですが、本当はいっぱいあります。それを理解して、肩の力を抜いて頑張りすぎはいけません。悪化因子をゼロにするのは難しいので「皮膚さんごめんなさい」と思いながらリカバーできる範囲で好きなことをする。たまご褒美もないとね。

患者さんにとって甘いものが皮疹に良くないならやめさせないといけません。平日は我慢して、休日はがんばったご褒美でことにするとやめやすいですよ、ぐらいいやんわりと言っています。

—— 「疾病負荷」対策、またストレスの回避や解消方法、患者さんへのアドバイスをお願いします。

アトピーによって心が「のびのび」しなくなったら、これ一番良くないことなんです。一番の疾病負荷なんです。我慢は大敵、やっぱり欲を開放することも大切だと考えます。睡眠欲なら、眠れないぐらいかゆみがあれば抑えないといけません。食欲なら食べたいものが食べられないのが疾病負荷。なので、アトピーが悪くなるのをわかっているのに食べた時は、しっかり治療する。我慢もストレス、皮膚を治さず野放しにするのもストレス、バランスが大事なかなと思います。もちろん薬をぬる負荷もあります。どこを探るかですよ。

疾病負荷対策としては、開放すること、くよくよしないこと、ポジティブに考えることです。心の指導では感謝と笑いと言葉の三つをこころがけてもらっています。言葉は魂をもっている、ネガティブな言葉を言わない、使うと自分にネガティブが返ってくるよと伝えていきます。

—— 先生の楽しみをお聞かせください。

好きな剣道は時間も少なくできてませんが、今は、寺社仏閣巡り、教会など祈りに関するものが好きですね。自分自身を「観つめる」といいですか、客観的に見る。瞑想などを体験するのも楽しいですね。

—— 本日は、貴重なお話ありがとうございました。(文責 三原 ナミ)